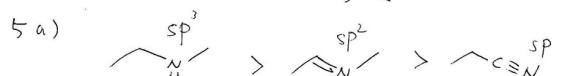
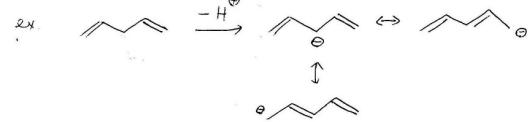


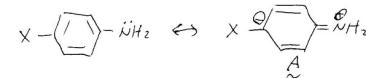
アニオノン-トロトとその寄与構造の並び。



窒素のs性大  $\Leftrightarrow$  非共有電子対の核による束缚大  
 $\Leftrightarrow$  鹽基性↓

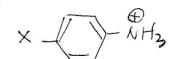


考え方①  
プロトン化する前の状態の共鳴構造



$X \leftarrow$  電子求引性  $\Leftrightarrow A$  の寄与構造が安定  
 $\Leftrightarrow$  窒素にプロトン化すれば少し良い  
 $\Leftrightarrow$  鹽基性と少し弱い  
(無論、 $X \leftarrow$  電子供与性なら反対)

考え方②  
プロトン化したもののが共鳴構造



$X \leftarrow$  電子供与性たまは  $\oplus X = \text{C}_6\text{H}_5\text{NH}_3^+$  といふ  
寄与構造描け。この構造は右端の窒素上の正電荷と  
隣接炭素上の負電荷が打ち消し合って安定化している。  
つまり、 $X$  はアミニウムイオンを生成しあげること  
 $\Leftrightarrow$  鹽基性大

$X \leftarrow$  電子求引性たまは  $\ominus X = \text{C}_6\text{H}_5\text{NH}_3^-$  といふ  
不安定化する。 $\Rightarrow$  鹽基性小

なお、 $\oplus X = \text{C}_6\text{H}_5\text{NH}_3^+$  から電荷を中和して

$\oplus X = \text{C}_6\text{H}_5=\text{NH}_3$  と描いてよいわけだ。(Nが10電子構造となりX)